タイトル：根本大塔

高野山を設立後、空海と知られる弘法大師(774-835)は根本大塔の建立を始めました。この塔は祈りの場としてだけでなく、真言僧侶の訓練や瞑想にとって重要であるツール、胎蔵界の立体曼荼羅を設立するためでした。根本大塔の建立は816年に始まりましたが、弘法大師はその完成前に永遠の瞑想へと入られました。継承者であった真然大徳(804～891）が残りの建設を監督し、876年に完了しました。

根本大塔は、多宝塔様式としては日本最初のものと言われており、二階建ての塔です 。雨や風の際には、来場者は、尖塔に繋がる数々の風鐸が鳴るのを楽しめます。密教の教えを広めた真言八祖が、根本大塔の壁の角に描かれています。ここには弘法大師のみでなく、弘法大師に密教を教えた師、中国唐の密教僧である恵果(746-805)も含まれています。

堂内には珍しい胎蔵界の立体曼荼羅があります。これは形而上学的な世界を表現したものであり、真言密教にとって重要です。中心にある大きな大日如来の像（サンスクリット語ではVairocanaとして知られています）は、金剛界の四仏 や十六大菩薩の像や、それらが描かれた柱に囲まれています。 曼荼羅とは通常描かれているもの、または織物で表現される事が多いです。そのため、根本大塔はシンボリックで神聖な密教の教えを体験できる稀な機会です。

根本大塔は、火災や雷により、何度も被害を受け、再建されてきました。直近の再建は２０世紀の初期に行われました。